

再生骨材製造の高効率化や再利用促進など

NEDOプロジェクトに参画

黒姫／武蔵野土木工業／東京テクノ

コンクリートの再資源化事業を行う黒姫（東京・足立、唐澤明彦社長）は、武蔵野土木工業（東京・町田、土方利夫社長）並びに東京テクノ（東京・町田、岡本利治社長）とともに、竹中工務店、鹿島建設、栗本鐵工所、コトブキ技研工業、三和石産、成友興業、八洲コンクリート、吉田建材が共同研究先の明治大学、業務委託先の竹中土木とともに進めている（国研）新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の補助事業である「再生骨材・集積回収骨材を使用した省エネルギー・省CO₂・省資源型

サーキュラーコンクリートの開発」プロジェクトに、昨年12月12日付で再資源化工場として参画したことを明らかにした。

同プロジェクトは、コンクリート製造・建設分野における資源循環と環境負荷低減を目的としており、CO₂排出量を削減する環境配慮型セメントに加え、解体コンクリートから回収された再生骨材を活用することで、CO₂排出量の削減と資源の再利用を促進する。

現在多くの再生砕石は路盤材などでのダウンリサイクルが主流であり、再生骨材としての利用は多いとは言えない。また、建設現場で発生する年間約400万トンの戻りコンクリートも十分に再利用されていないという。

同プロジェクトでは、①再生骨材製造装置の高効率化・低コスト化、②再生骨材の効率的な製造・品質管理技術の確立③戻りコンクリートの有効活用④環境配慮型材料を用いたサーキュラーコンクリートの開発、⑤副産物（微粉）の用途開発を五つの柱として、再生骨材をコンクリート材料として再利用する水平リサイクルの実現

を目指す。

今回のプロジェクト

待される。

武蔵野土木工業（東京テクノ）の松田信広

部長は「技術的な側面だけを言えば、どのような再生骨材をどう使用すれば良いかが整理できてきているの

で、再生骨材コンクリートを使うことは可能。しかし、広く普及させていくにはさらなる効率化や業界構造的な整理が必要な部分もあり、実際にサブライ

チエーンを構築して使

用例を作っていくことで、解決していくことも多いだろう」と話す。

また黒姫の唐澤明彦社長は、「実際、再生砕石の滞留の問題は深刻だ。特に現在都市部では解体コンクリートや戻りコンクリートの排出量が多い割には再生砕石や再生骨材へのリサイクル施設が少なく、地域の使用量のバランスが崩れ、地産地消が難しくなっている。サーキュラーコンクリートの新たなサブライチエーンの構築が進むことで、こういった部分の改善につながる可能性もある」と話している。

「再生骨材の製造技術の確立および品質管理手法の構築」であり、これまで積極的に使われることが少なかった再生骨材コンクリートの利用事例を増やすことにつながるが期待される。